

会

談

座

女性施設の 一〇〇年史

中村紀伊 (財)主婦会館館長

志熊敦子 (財)日本女子社会教育会常務理事

司会 有馬真喜子 (財)横浜市女性協会理事長

1. 「民間自力」こそ原点 第一期・第一回

有馬 最初に、婦人会館の歴史は戦後から始まるのか、それとも戦前にすでに始まっていたと考えた方がいいのか、それは「婦人会館」をどう定義するかにかかってく

ることでしそうが、そのあたりからはじめたいと思いま
すが、いかがでしょうか。

志熊 最近、私は婦人会館の歴史を調べておりますが、典型的な婦人会館というのは、婦人団体の拠点なんですね。何のために女たちは建物をつくつたのかと言えば、活動があるからなんです。活動があるから建物がある。それが原点ですね。

この原点にまでさかのぼると、一般的には、東京YWCAの会館が我が国最初の婦人会館ということになってしまって、またYWCA自らそういう自負をもつていています。YWCAの歴史をまとめた資料に、ちゃんと「我が国最初の婦人会館」という見出しがあるんです。

有馬 それはいつ頃建設されたのですか。

志熊 大正四（一九一五）年です。東京YWCA神保町会館ですが、大正一二年の震災で瓦解して、また建て直しています。しかし、日本キリスト教婦人矯風会の会館はそれよりももっと古いんです。

有馬 新宿の百人町のあの会館ですか？

志熊 ええ、これが明治三三（一九〇〇）年なんです。矯運動の拠点として慈愛館と名付けられたこの矯風会の施設には、今の「ヘルプ」の原点があるんです。ですから婦人会館を、女性が、女性解放とか女性の地位の向上のために、自力で、活動の拠点として建てたと考えると、全国初ということになっているYWCAよりも、実は矯風会の方が古い。

有馬 矢島さんの時代ですか。

志熊 そうです。矢島梅子が会頭の時代ですね。一〇〇年近い歴史をもつこの一つの婦人会館は、両方

とも国際的な組織ということもあります、会館の建設資金は外国人が出しています。東京YWCAは、エマ・カフマンというカナダ人で富豪の娘ですが、たまたま日本に旅行にきて、東京YWCAに関心を持つて、私財を投じていろいろ、この活動を支えたのです。

矯風会の慈愛館は、アメリカのクリントン財団というのが、当時のお金で五〇〇ドル出しています。おもしろいことに、お金を出すかわりに口も出していて、慈愛館規則には、館長はアメリカ人で日本人は運営と決まっていた。

自力で建設するのが婦人会館の原点と言いましても、たまたま二つとも片方はカナダ人で片方はアメリカの財団がかなりの金額を出して、その寄附金で建っているんです。

戦前の歴史では、これら国際組織の婦人団体を拠点とした会館のほかに、昭和の初めに、私が今おります日本女子会館ができています。これは昭和一二年（一九三七）に竣工しました。前の二つの会館は外資ですが、日本女子会館は社会教育関係者の募金のほか、天皇家と各宮家が醸金しています。

戦後、婦人会館の活動が、民間自立という目標を立

式典 国女性施設センター第①回
1995年、学習書房、編集：横浜市女性協会

て、各地の会館が一円募金から始まつたというのは画期的なことですけど、戦前は外國の財団とか天皇家とか宮家の醸金があつたことに注目したいと思います。

私の方の日本女子会館も、やはり婦人団体の拠点なんです。大日本聯合婦人会。これは文部省が家庭教育の目的で昭和五（一九三〇）年につくつたもので、この時代は、全国に網羅的に組織された婦人団体は官製になつています。

戦前の三大婦人会といふのはそれぞれ所管の官庁があり、大日本聯合婦人会が文部省、国防婦人会が陸軍省、愛國婦人会が内務省です。この三つが昭和一七年（一九四二）に解散、統合された。この婦人会の名前が大日本婦人会です。

最初の婦人会館が誕生した一九〇〇年代は、日本の産業化・近代化が急速に進展し、紡績や製糸など女性の職域が広がる一方、都市の形成とともにいわゆる事業主婦が登場しました。女性の自立と解放を求めて婦人団体活動が始まつた時期ですが、しかし経済不況は女性の立場を弱いものにしていました。

YWCAは、当時の日本女性の低い地位を教育とキリスト教を通して引き上げたいという使命感から創設され

教育・小学大学の男女共学・婦人參政権・婦人に不利なる諸法規の改廃・母性保護等の要求をなす」などいろいろ書いてあるんですねが、最後に「事務所、公会所、教室、婦人共同宿泊所、簡易食堂、娯楽所、運動場、図書館等を含む婦人会館の建設」となっています。

それで私、なぜここに婦人会館というのが唐突に出てくるんだろうと思っていたのですが、やはりYWCAとか矯風会の婦人会館を見ていたわけですね。一九二〇年ですから、ちょうど東京YWCAの五年後でしょう。その活躍を見ていて、やはり活動の拠点として、婦人会館を民間自力でつくりたかったんですね。結局、これは建たなかつたんですが。その後婦人運動自身が、官製の団体に散らぎれてしまつた時代が続きましたから。

市川先生は戦後になつて初めて婦選会館をつくられましたが、奥むめおは、婦人会館と言えるかどうか分からぬけれども、婦人セツルメントを昭和五（一九三〇）年に東京の本所に建てています。セツルメントという言葉もやがてだめになつて、途中から隣保館という名前になりますが、託児所や夜学、購買会、学童保育や、家族計画の相談などもやつているんですね。サンガ夫人のバースコントロールですね。戦争末期には母子寮にもなり

たものですから、女人が手に職をつけなければいけないと、活動のなかに職業訓練をとりいれていました。カフマンさんというのもともと家政学を専攻して、体育に興味があつた人だそうで、YWCAはそういう大変開明的な活動をやつたわけです。

またもう一方のキリスト教婦人矯風会の方は、矯風運動として廢娼運動に力を入れたのです。

この一つの婦人会館の草創期を第一期としますと、第二期は昭和の初めの日本女子会館で、いわゆる官製婦人団体の施設としての会館です。日本女子会館には宿泊施設があります、全国から人を集めリーダー研修などが行なわれています。

第一期、第二期とも、婦人団体活動の拠点ということは共通しています。一期の方は国際派で、二期の方は民族派ともいえますね。

中村 いまうかがつていて、腑に落ちたことがあります。大正九（一九二〇）年に新婦人協会が創立されるのですが、その際に平塚らいてう、市川房枝、奥むめおで作った綱領の中に、「この会の目的を達成するために婦人会館を建てる」という項目が入っています。

創立宣言だから、新婦人協会の仕事として「女子高等

ました。

それと、奥むめおはもう一つ、働く婦人の家というのをつくっています。大阪が昭和八（一九三三）年で、東京と福井が昭和一〇（一九三五）年。名古屋も同じ頃だと思いますが、その地域のいわゆる働く婦人の人たちと一緒にになって、カンパを集めて建てた。これは月刊の『婦人運動』という雑誌の拠点ですね。

志熊 矯風会も、運動を広げながらだんだん地方に婦人ホームという形で施設を建てていくようになります。大阪婦人ホームは明治四〇（一九〇七）年にできました。中央の会館をまずつくりて、活動を通してだんだん地方に増やすというやり方が、もうすでにこの時期に出てきています。

おもしろいのは、震災後、昭和四（一九二九）年に矯風会の新会館ができて、その開館式の時に、矢島梅子さんが、「同志の運動の本拠が落成しました。大久保の閑静な土地に、事務所と言うよりもホームと言いたい落ちついた感じの建物ができました。婦人にして傑作だと褒めたりくさしたり、分からぬことを言った新聞もありますが」と（笑）。

中村 何か今と同じようなことを言つているわ。

有馬 変わりませんねえ、全然。

志熊 「女なればこそと思われるほど、こまごまとした注意、気持ちよく行き届いています」「男子の力なくしては建たなかつた時代、婦人の力のみで歩こうとした時代を過ぎて、今や男女協調の共同戦線を張りましょう」(笑)と書いてあるんです。もう男女共同参画型のアイデアはあつた。

有馬 婦人会館の中でやっていることも、ものすごく斬新ですね。片や職業訓練だし、片や保育所で学童保育だの。ただお茶だお花だという話とは全然違うわけですね。

志熊 今の女性施設を原点までさかのぼつてみると、やはり「はじめに活動ありき」ですね。活動をさらに充実、前進させるために施設があるということが、歴史の中ではつきり言えるわけです。現在はむしろ、施設を建てて活動を作っていくというふうに、この一世紀のうちに逆転していますが。私は、婦人の施設というのは、原点をしつかり認識しているものであれば、プロセスはどういう形でできてもいいと思っていますけど。

それからもう一つは、やはり人の問題です。施設といふのは、人があつてこそという感じがします。それこそ

せつから建てた施設が地震で灰塵に帰しても、また次の会館を建てていくというエネルギーはすごいものです。東京YWCAの初代会長は津田梅子なんです。日本女子会館の初代会長は吉岡彌生で、日本女子青年団の会長でもあります。けつこうその当時の二〇世紀初頭の婦人運動家が関わっているのです。

有馬 さつきうかがつたように平塚らいてうさんなど參政権運動の方々にも婦人会館建設のアイデアがあつたということですから。

2.

地域婦人会館から始まる戦後

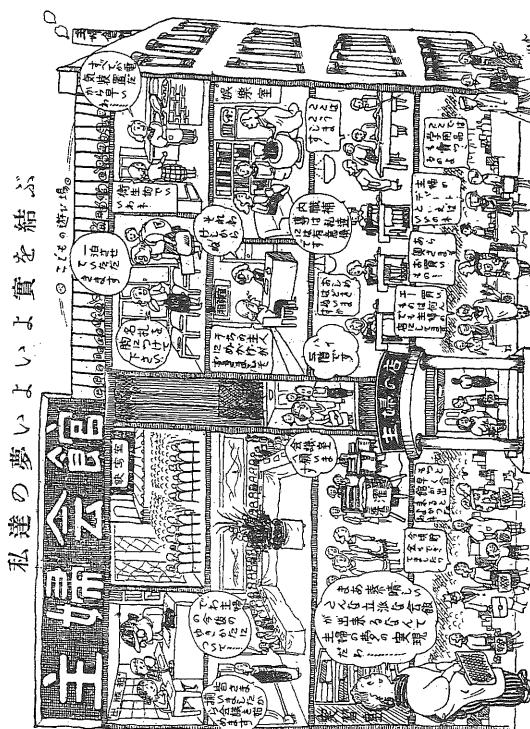
第三期

志熊 戦後は逆に全国組織の婦人会館よりも、むしろ地方の婦人会館づくりが先になりました。

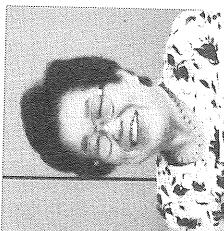
中村 大阪では、国防婦人会の時に建てた会館をそのまま清算法人が引き継ぎ、大阪婦人会館というのができました。そういうのが熊本にもあります。また、昔の国防婦人会館など戦前につくった会館を、地域婦人会が引き継いで継続するという形もあります。

奥むめおの作ったセルメントも働く婦人の家も、戦

東京主婦会館への實現へ

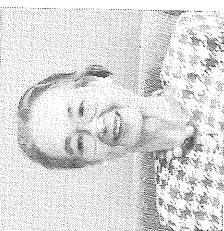


『主婦連より』1949年11月1日号より。店舗、内職部等、相談室、会議室などが描かれています。



● 中村紀伊 (なかむら・きい)

主婦会館館長、主婦連合会会長。
48年の主婦連合会創立に参加、91年より現
在職。多くの審議会の消費者代表委員などを務
め、消費者問題に取り組んできました。全国婦人会
館協議会会長代行、国際婦人連絡会会員。



● 志熊教子 (しくま・あつこ)

日本女子社会教育会常務理事。
48年に神奈川県教育委員会で婦人教育など
を担当、文部省に転任後も社会教育局婦人教
育課長、国立婦人教育会館館長など、婦人教育
を歩む。「自分史としての婦人教育」(著者)。



● 有馬真喜子 (ありま・まきこ)

横浜市女性協会理事長。横浜女性アーチ
3年生。朝日新聞記者、フジテレビ「奥さまニユ
ース」キャスターなどを経て、88年より同協会
国連婦人の地位委員会日本代表ほか。

災で全部焼けてしましましたが、主婦連ができたのが昭和二二（一九四八）年ですね。奥むめおは、次年にには、もう主婦会館を建てようという動きを始めています。今日、うちの機関誌の復刻版からコピーしてきましたが、もう想像図が載っているんです（前頁の図参照）。

有馬 こんなイメージでという絵ですか。

中村 そう。奥むめおは絵で表すのが好きなんです。そこには家族計画の相談とか会合とか、生活相談とか、主婦の店もある。その頃だと必ず買い物をして帰りますからね。

この時の建設資金は、最初一口二〇円の募金でした。実現するまでに七年かかった。建ち上がったのが昭和二二（一九五六）年ですから。機関誌には募金の記録がみんな載っているんですが、なにしろ奥むめおは日本中歩いて、行く先々で二〇円募金の申込用紙を置いてくる。募金の他にも主婦手帳を売ったり、毛糸やタオルを売ったり、もう教組様みたいです。最後はお米ひと握りずつ皆がだしあつて、開館式の日には米俵がきました。

志熊 つまり、私の分類でいくと第三期は、地方の婦人会館というより手作りの婦人会館づくりになるわけです。東京では、その意味では主婦会館が戦後の新しい会

東京から我々が出て、大阪、福島、熊本、奈良、福井、富山などの婦人会館代表と、その他計画中の仙台、神戸、水戸、山梨など二〇余名の出席者があつた。

有馬 すごいですね。

志熊 地域婦人会館ができていったのは、占領政策と非常に深い関係があると思うんです。国防婦人会、愛国婦人会、大日本聯合婦人会という戦前の婦人団体に対して、占領政策がものすごく厳しかつたんです。これは軍国主義の根幹だという考え方がありましたから、中央の組織は、極力排除された。で、分断して統治すると言いますが、地方の婦人活動というものは、占領政策の中で、自生運営が強力に指導され、その中で地域婦人会が生まれた。

有馬 進駐軍の日本の民主化政策は、地元に自分たちの拠点の婦人会館を建てようという動きに結びついたんでしょうか。それとも結びつかなかつたんでしょうか。

志熊 私は、占領政策は確実に全国の女性を地域別に分断したと思っています。個別の婦人の地位の向上とか意識の向上の指導には非常に熱心でしたが、戦前の全体主義的な組織が再現されることに危惧があつて、日本の婦人が施設を作つて拠点をもち、力をつけてもらつて

館づくりでした。

有馬 主婦会館が一番最初ですか。

志熊 たしか婦選会館は昭和二六（一九五二）年ですよ。中村 二一年じゃないですか。主婦連合会を作る時の相談は婦選会館でやつたんですから。

志熊 どこを婦人会館の創設年と言うのか、会館としてオートピニシングした時か、事務所みたいな形をすでに会館と見るのか、難しいところです。

有馬 その後、地域の婦人会館は地域の活動の拠点としてずいぶん建ちますでしょう。

中村 奥むめおが全国を歩いて二〇円募金を呼び掛けている間に、それぞれの地域で先に婦人会館ができるいくわけです。今朝古い資料を見てきましたが、主婦会館ができて一九五六年の一月の機関誌に奥むめおが「私が七年かかつてやつている間に、はや一七もの婦人会館が建ちました」と書いています。建つたのは多くは地婦連系の会館です。さらに計画中のところも少なくなく、この時、それらの婦人会館と、これから持とうとする地域の有志が集まつて、「婦人会館を語る会」を主婦会館で開きました。これが全国婦人会館協議会の第一回目なんです。ネットワークですね。

は危険だという考え方方が強くありました。だから占領政策は施設には結びつかないし、団体を作ること自体も牽制したわけです。戦前の指導者は全部チエックして、地方では戦前の愛国婦人会、国防婦人会のリーダーは、一切タッチさせなかつた。もうそれは徹底していました。

有馬 公職追放みたいなものですよね。

志熊 そうです。実質的には。それが民主主義の原理と同時に認かれるわけです。「今までには国家目的でやみくもに走つていつたけれども、女人人はもつと主体的に生きなければいけない」とかね。女性に対しては団体よりもグループを、と徹底した小集団指導をしたわけです。一八〇度転換するわざですから。

有馬 考え方そのものを変えてもらおうと。

志熊 ですから、とてもそれが施設づくりと結びつくという感じではなかつたですね。占領政策としては、もう徹底した分断主義でしたから。

有馬 なるほど。そういうのが片方にあつて、もう片方に、今でいえば消費者運動というのでしょうか、苦しい暮らし、物不足をなんとかしてくれという運動ができましたね。あのつかないマツチの告発とか、米よこせのおしゃもじデモとか。あれは日本の飢餓を背景にし

ていた……。

中村 そうですね。主婦連は生活防衛の運動から始まったのですね。奥むねおは、上からくる運動ではなくて、毎日の暮らしの中から主婦たちが自発的に声をあげ、世の中を変えたいと考えるようになる道を選んだのです。粗悪品のマッチや配給のお米、お味噌、電気料金などをとりあげて、非常に具体的な運動をやつた。そして問題をつきつめていくと、最後にそれは政治に結びつく。台所と政治はそうやって結びつくんです。

それをやつていると、やはり集まる場がほしい。会場を借りて歩くのが本当に大変でした。キリスト教の教会や業者の協会の事務所、議員会館の会議室を借りる。小学校の校庭を借りて大会をやつたこともあります。年中場所が変わるので、みんな土地不案内の主婦ですから、毎週会場が違うというのは、大きな悩みの種でした。

それでは、会場がほしい。同じ所に集まって話をしたい。できればそこでおかずも買って帰りたい。それから相談もしてもらいたい。地方から来たら、泊まる所がほしいと。それででききほどのこの絵になるわけです。

有馬 非常に地道な、具体的なところからの発想です

した。それは、地域婦人団体は地域の女性を全部網羅しているという、公共性が前提にあつたからなんです。地婦連に累賛を出すことは、婦人全体を潤すことだというわけです。

有馬 だけど、土地は県なりが提供したとしても、建物は自分たちの手でつくりたというところも、けつこうあるんじゃないですか。

中村 たとえば福島県は電球を壳つたというし、鹿児島県は古紙回収で新聞を五十万貫と集めた。ほかにも一円募金とか二〇円募金とか、そういうのをけつこうやつたんですよ。そういうふうにして自力だけでつくりた会館もあるし、県費や何かももらって建てたところもあります。

有馬 ただ、運営は自分たちでやつていく。運営にはいろいろご苦労されたことでしょうね。

志熊 一五年くらい前に中村さんと『社会教育』で懇談をしたとき、今までの地婦連の会長たちが婦人会館を建てるこことによって、婦人団体の組織運営だけでなく、経営の戦術、能力を身につけたという話がすごく印象的でした。

団体活動をしている限りは、事業一本でしょう。ここ

ね。ところで、もう一方の地方の婦人会館はどういう経緯でつくられていったんでしょうか。

志熊 婦選運動のような全国的な規模の婦人運動というのはやはり東京中心で、そんなに地方まで広がってはいなかつた。もし広がっていたら、もっとよくなっていたんでしょうね。明治、大正、昭和にかけて、先覚者たちが懸命に努力をしてきたけれど、戦後六年間では一般の婦人の中に広くは伝わらなかつた。

そのことは地域婦人団体の土壤と関係があるんです。地域婦人会は、戦前の大日本婦人会の土壤を無視して存在できません。その全国組織である全国地域婦人連合会は、昭和二六（一九五一）年、講和条約の締結で占領政策が終わる間際を縫つて、山高しげりさんが結成したわけです。

その時は、全国的にものすごく反発がありました。半分くらいが反対したんじゃないでしょうか。占領政策のもともと、地域ごとに積み上げ方式でやつてきたのに、なぜ突然全国連絡協議会を作るのかと。

占領政策時の婦人団体の所管は教育委員会なんですが、その中でできてくる地域婦人会館は、県庁所在地に県の土地を提供される、というのが基本的なパターンで

ろが施設を持つと、経営という概念がなければ成り立つていかないわけです。会館を持つことによって、新しいリーダー像と言いますか、資質が問われる。中村さんがそれをメリットだと言われたのが、非常に印象的なんです。

中村 だって、昔は小切手をどういうふうに処理していくか知らないという会長さんもいらしたの。そうですよね、商売でもしていない限り、婦人会で会長さんをしているだけじゃ、小切手なんて見たこともないし。誰かに切らせるにしたって、会長さんがその仕組みを知らなければどうにもなりません。

それから従業員の就業規則。退職金規定とかね。婦人会館協議会に主婦会館のを全部もつていて、こういうものを作らなければいけないんですよと、そこからやつたし。会館の経理や運営もあります。熱心な経理担当さんは、主婦会館に来て個別に勉強なさつた。経営者としての女性の能力をひらかせた意義は大きいと思います。

有馬 いつか中村さんにうかがつたことですが、経営のためにあちこちで取り上げたのが結婚式。当時の新生活運動の「結婚式を簡素化しましょう」というスローガンと同じくど重なつて、婦人会館を結婚式の会場にして、人前結婚で誓いの言葉をいうとか。それが一方で新しい

運動を展開することであり、一方で婦人会館の経営を保つことであつた。それがやがて貸衣裳部になつていつたり。

中村 一時は結婚式でたいへんお金持ちの婦人会館もあつたんですよ。文部省の志熊さんから、あまり結婚式ばかりしているような婦人会館では意味がないと叱られたり(笑)。私もそう思うと言つたんですが。

志熊 あの時は、かなり辛口なことを言ひまして。だけど、矛盾してきたのですね。新生活運動の結婚式をしていふると利潤が上がりません。豪華にやらないと。

有馬 経営のノウハウを身につけたら、逆にそつちに走つたりして(笑)。結婚式以外では会館の運営費は何で稼いだんですか。

志熊 広島なんかは生協と地婦連と婦人会館の三位一体という方式でした。生協活動で、かなり利潤が上がる。婦人会館の事業だけで、そんなに運営費が出るはずがないです。

中村 会長さんの政治力で県や市の消費者センターを持つきたり、県の補助金でそこで研修会をやつたり、いろいろですね。

自分たちで会館の土地も持つてあるところはいいんで

すが、県の土地に建ててしまつたところでは、今になつて、なぜ地婦連に県の土地を提供するのかと問題になつてきていています。当時は県の土地に自分たちがお金集めをした建物を建てるのは当たり前のことでしたが、時代も変われば知事も変わりますからね。賃貸契約では更地にして返さなければならぬんですが、今の建物を更地にして返すとなつたら大変なお金がかかります。

当時は地婦連が、全県下を網羅したただ一つの団体だったのに、今はもう各種団体が一杯ありますから、特定の団体に県の土地なんてやれないということになつてくるわけです。

志熊 そうですね。それが第四期の問題です。第三期の時は、県庁所在地にどんどん婦人会館ができた。

有馬 有権者同盟とか、そういう伝統的な、中核的な婦人解放運動の活動は、牽引力にはなつてゐるけれども、そんなに地方には広がらない。地方では一般の女性たちには、むしろ敬遠されていたのじゃないですか。国際婦人年以降、すいぶん市川先生の評価も変わってきたけれど、それまでそんなに日本の女性たちは開明的でもありませんから、婦人運動のリーダーたちが頑張って中央で活動してきたのは、日本の婦人運動史上、大変貴重な功

績ですが、それとは別に、地域婦人団体を中心にして婦人会館ができていくのが第三期です。

3. 公立公営の全盛時代 第四期

志熊 第四期になると社会経済の変動を背景に、地域婦人団体の組織が崩壊していきます。そうなりますと、今おつしやつたように、地域の婦人団体が、即、地域の女性の代表組織である限りは、公費を使って公有地を提供しても異論はなかつたのですが、地域婦人団体が、ただの一婦人団体に縮小してしまつた時に、これはおかしいんじゃないいかということになつてきます。

第四期になると、国際婦人年の政策として国立婦人教育会館の創設が契機になり、公立の婦人会館が新たな装いで登場してきます。

中村 第四期以前にも公立はあつたけれど、初めは私立がほとんどなんですね、中央も地方も。公立は、昭和二二(一九五七)年に神戸市立、大阪市・府の婦人会館が、昭和三七(一九六二)年、翌年と建つてますが、それが早い方です。国立の婦人教育会館が昭和五一(一

九七七)年です。私立と公立の数が、私どもが把握しているかぎりで逆転したのが昭和五九(一九八四)年です。

有馬 公立というのは、やはり県なり市なりがお金を出し、建物を建てるわけですね。

中村 ええ。公立公営です。

有馬 その時も、そこは地婦連の活動の拠点になるわけですか。

中村 いや、そこが違つてきます。地婦連が中に入る所もあるし、入らない場合もある。この間愛媛へ行つたら、前からある県婦連の会館があつて、その近くに愛媛県の立派な女性センターがありました。そつちは公立公営で、全ての女性が利用します。もう一方は地婦連の会館です。だけど全然赤字を出さずに運動の拠点にしていました。

そういうふうに、私立の婦人会館と公立公営の会館が分かれている所もけつこう多いです。全国婦人会館協議会でもそれが悩みで、どうしようか、入ろうか入るまいかというので、そこは意見が分かれているんです。

石川県などはやはり県の土地に婦人会館があつて、すぐこはやつてました。兼六公園の前で、女性のコック長

で素晴らしいお料理を出してね。でも、県が文部省の補助金をもらって大きい建物を建てたんです。その総合会館の中に婦人会の人も入るし、宿泊もやる。市の婦人会館も入る。消費者センターも入る。全部入ってしまいました。

滋賀県には二つ並んであるでしょう。あれは全国婦人会館協議会で議論して、自分の城は持っていた方がいいというので、県のほうに入らなかつた。今度で三回目の会館建て直しです。

年中、もう会議のたびに議論になるんです。私立はどうあるべきか、私立がどう生き残るかというのが今の課題ですね。

志熊 さつき言い忘れたのですが、公立が増える時に、消費者センターとの併設というのがあるんです。

有馬 なるほど。神戸や宮城なんかもそうですね。自治体はよく消費者センターと一緒にさせたがりますよね。

志熊 かながわ女性センターもそうです。

中村 だつて女性が行くんだから、行く方にしてくれれば便利ですもの。昭和四三（一九六八）年消費者保護基本法ができて一年目に、全国の参加団体が集まつて、主婦連で消費者ゼミナールというのをやつたんです。その

時、この法律を作るときの自民党の代表だった砂田さんが、消費者センターというのに助成金を出して、各県に作つていくんだという話をなさつたんです。

それを聞いて帰つた岩手の婦人会は、県の補助金をつけて、消費者センターと併設で婦人会館を建てた。だから、そういう情報というのはおもしろいですよ。

4. 大型女性会館の時代へ 第五期

志熊 第一期、二期ときて第三期は地婦連の婦人会館時代となり、やがて四期になるとその崩壊が始まる。分化が始まる。

有馬 公立公営も入つてくるわけですね。

志熊 そしてその第四期の途中で、国際婦人年にぶつかるわけです。一九七七年の国立の婦人教育会館がものすごく大きな転換になつて、それ以後大型の婦人会館時代に入るんですね。それが第五期です。

有馬 かながわ女性センターや横浜女性フォーラム、このフォーラムよこはまもこの頃ですよね。

志熊 まだ続くでしょう。東京も来年できるし、大阪が

今年。朽木もできますね。

だから、地婦連の会館があるのにも拘わらず、公立の婦人会館もできるという、複合的といふか複数の婦人会館時代というのが現在ですね。国立婦人教育会館のデータによると文部省所管の婦人会館の数は、平成四（一九九二）年の四月一日で一一五館です。これがいちばん新しいデータです。これによると、国立が一でしよう。公立が二〇三です。私立が五一だから、公立が四倍になつてしまつた。

中村 国立婦人教育会館を志熊さんが建てようと言われた頃からですよね、私どもとお付き合いが始まったのが。

志熊 はい。婦人会館の施策の中で、国立を何のために建てるのかといったときに、全国の婦人会館の活性化といいますか、運動しなければ、国だけが大きいのを建てたって意味がないわけです。ですから同時進行で始めた「地方の婦人会館との連携を図る」という面で、民間自力で婦人会館のネットワークを組みましょうとやつていらした中村さんは、国立の推進の大きな力だったわけです。

有馬 志熊さんは、あの時になんで国立の婦人教育会館

をつくろうと思いつになつたんですか。当時の課長でいらっしゃつしゃつたでしょう。

志熊 行政的な観点でいきますと、社会教育行政の施設としては、公民館、博物館、図書館、それに対象別の施設ですね、青少年施設とか、少年の家とか青年の家とかになります。したがつて社会教育施設の整備という形では、婦人が抜けていたのです。だけど、社会教育といつても、実態としては女性の学習で支えられているんです。これだけ広範な女性の学習の実態があつて、その拠点施設がないというのは、施設の体系的な整備という観点からするとおかしいと。それで国立を建てようというのが一つの理由です。どちらかといふと、事務的な話ですが。

有馬 お役所向けの話ですね（笑）。予算獲得向けのね。

志熊 もう一つは、中村さんの婦人会館の動きを見てきて、この変動社会の中で、地婦連が弱体になる、女性が消えていくという危機意識がありました。戦後、地婦連は教育委員会と密接につながつて、一人三脚で婦人教育をやってきましたが、地婦連自身も、婦人学級あたりをピートとして、だんだん学習に対応できなくなつてきました。学習活動のある種の終焉といいますか、団体活動の

限界というものが、国際婦人年あたりから見えてきていたんですね。団体が衰弱すると、もう女性の姿が見えなくなってしまうわけです。

ですから、非常に抽象的な言い方でけれど、施設活動で女性が顕在化してほしいというのが、私の心情的な願いでした。初期は、それこそ団体活動のために施設ができるわけですが、今度は団体活動が下降していくなかで何とか施設づくりでそれを顕在化させたいと。

こういう施設ができることによって、たしかに、その地域の女性が見えてくるんです。ですから、私には「婦人会館、女性センター」なかりせば」という感があります。施設は施設の限界がありますし、団体は団体の限界がありますけど、女性センターによってその相乗効果が生まれるのではないかでしょうか。

中村 それまでね、文部省は婦人会館活動に冷たかったんですよ。別に志熊さんが冷たかったわけじゃないんだけど(笑)。

志熊 団体中心でしたからね。

中村 ええ。団体中心で、施設には冷たかった。志熊さんが初めて婦人会館協議会の会議にいらしたのが、長崎からかな、何で今こうという感じだったわね。

志熊 前年に、国立の調査費がついたんです。まだ摸索時代でしたから、婦人会館協議会との連携の後にやないと国で婦人会館をつくれないのじゃないかと、招かれざる客で行ったの(笑)。

中村 最初はみんな「なんで、今ごろ文部省が」という感じでしたものね。でもいろんなお話をしているうちに、よし応援しようということになって、それから我々は、一生懸命、国立を建てる応援団をやつたんです。全部の会館が署名をして出したり、大学婦人協会や各種婦人団体が全部署名して、各大臣の所を回ったり。

有馬 その時、中村さんは、国立婦人教育会館に何を期待されたんですか。

中村 やはり我々が民間でやれないことを、国はやってほしいと。私も婦人教育会館調査研究協力者会議に入っているんですが、考えたのは、日本中からたくさん的人が行つて泊まれるように、地方でもいいから広い所で、行つたらせいぜいして、交流したり勉強できるようにしたい。さらにネットワーク、女性情報の収集・提供。そんなことでした。そういう我々の所ではやれないこと、国しかできない仕事をしてほしいと。

志熊 それはとても重要でした。実際に婦人会館を運営

有馬 婦人会館協議会を作られたのは、だいたいいつ頃ですか?

中村 語る会からだから昭和三一(一九五六)年ですね。初めは、要するにみんなで一年に一回くらい各県まわり持ちで集まって婦人会館の話をしましそうと。すでに建てた所もあるし、これから建てる所もあるから、先輩は後輩に失敗談も含めて情報交換する——たとえばうちは冷房しなくて、すぐ困っちゃったのよとか、駐車場を作つたらけつこう儲かつたわよとか、こういう企画で講座や事業をやってみたらとか。

初めのうちは、ぜんぶ主催の婦人会館と集まった人たちが費用を出していたんですが、やはり県費の補助がほしい。しかし「婦人会館を語る会」では、県費の補助が出ないから、もうちょっと立派な名前がほしいというわけで、五回目の富山(一九六一年)から今の名前になったわけです。富山に行ってみたらもう、全国婦人会館協議会って、富山の駅の前に看板が立つていて(笑)そのまんま決まってしまった。

有馬 志熊さんがいらしたのは何年ですか。

中村 昭和四七(一九七二)年で、三六会館集まっていますね。

している方たちから、各婦人会館ができないことを国でやれという、機能分担を指摘されています。

現在は、女性問題解決の拠点を設置目的として公立の女性センターができますでしょう。自治体にとっては行政需要にどう対応するかという新しい分野なものですから、摸索状態にありますが、実際は、全体に施設がどれだけ利用されたかとか、主催事業に人がどれだけ集まつたかという利用効率に、とかく行政側は関心を持ちがちです。私はもともと、そういう発想だったら女性センターなんかは建てない方がいいという、かなりラジカルなことを言つてますけど。

いずれにしても、一般的な考え方では、地域でどれだけ多くの人が関心を持つたかということが、評価の基準の一つになりますね。

もう一つは、その事業がどれだけ創造的でかつ波及効果があつたかということ。横浜市女性協会のプログラムの波及効果はすいぶん大きいんじゃないですか。これらはソフトの時代だと思いますから、アイデアが勝負で、また一つの時期が生まれつづるような希望がもてますね。

有馬 どうもありがとうございました。(1994.7)